あとまで残る生涯研修の成果が大切
――スキナーの言葉に学ぶ

内山　充

薬剤師の職責や、医療現場および一般社会からの薬剤師職能に対する期待が、一昔前とは大きく変わりました。それに応えるための「自分作り」がすべての薬剤師の共通課題であることは誰もが実感しているところです。そして、めまぐるしく変化する環境と日進月歩の科学技術に即応する唯一の方策は、いろいろな形での生涯研修であることはいうまでもありません。しかし、生涯研修は大学教育とは異なり、教える側というより学ぶ側の責任が大きいものです。学ぶ側が、自主性を持って主体的に行うことが大切です。

最近の数年間で、薬剤師の生涯研修に関する認識と環境条件はかなり整えられました。当認証機構による第三者認証を受け、質の保証がなされた生涯研修・認定機関も増えつつあります。それぞれ、独自のビジョンを持った特徴ある研修が提供されていますが、運営の細部に関する方法や条件は、それぞれの機関にお任せしておりますので、受講者は、自らの職能向上の目的に沿った生涯研修を選択してください。

生涯研修の成果としては、当然のことながら研修によって得られる知識と技術が挙げられます。しかし、教わること、覚えることだけが成果ではありません。前回（10.31）のコラムでも述べましたように、学びの基本は記憶ではなく評価・推論です。自分で考える時間的余裕を持つことを忘れてはなりません。その余裕が、自分独自の発想や、自分にしかない能力を生み出し、社会から顔の見える薬剤師活動の原動力にもなり得るのです。

専門職の能力は、単に知識や技術の広さと深さだけで表わされるものではありません。多くのことを知っているということではありません。具体的で適正な実務行動を実践できることこそが真の能力です。生涯研修の目的は、このような「真の能力」を養うところにあります。

皆さんは、動物の学習行動を数量化するための「スキナー・ボックス」を良くご存知と思います。その B. F. Skinner の「Education is what survives when what has been learnt has been forgotten：学んだことがすべて忘れられたときに残る ’何か’ が教育（成果）である」という言葉が、晴山陽一氏（「すごい言葉」文春新書）によって紹介されていますが、これは生涯研修についても深い意味を示しています。日常業務での「真の能力」は、本来意識や解釈によるのではなく、ほとんどが無意識の動作として表れます。それはまさに、学んだことを忘れたあとに残っている大切な能力といえましょう。

生涯研修は大学教育とは根本的に違います。試験や時間割で試したり縛ったりすることは、特定の領域に焦点を絞った、あるいは受講期間の限定された研修では必要でしょうが、生涯を通じて継続する研修では、それよりも思考と評価の「訓練」のほうが、あとに残るものを増やしてくれます。学ぶ側も教える側も共に、真の能力を養うのにはどうしたら良いかを常に考えながら、より良い研修環境を作っていくことが必要です。

（2008.12.8）